

(第 24 回 : 2021 年 5 月)

フランス文化の薫る街モントリオール (その 1)

前回まで、これまでの勤務地であるイスラエルとアンカレッジにおける食の話について、当時の記憶を辿りながら披歴してきましたので、今回は 3 か所目の勤務地となるモントリオールということになりますが、その食文化を語る前に、モントリオールという街について、その歴史や地理、勤務していた当時の状況などを少しお話しさせていただきます。

北米のパリ (?) への着任

モントリオールは、人口 400 万人 (大都市圏) を擁するカナダ第 2 の都市にして北米唯一のフランス語圏であるケベック州最大の都市で、フランス文化が色濃く反映された、北米大陸の中でも異国的な雰囲気のある街です。

在モントリオール総領事館に在勤したのは、1982 年暮れから 87 年初頭までの 4 年 3 か月間、それまでの在勤がイスラエル 2 年、アンカレッジ 1 年 4 か月と短い期間だったのに比べ、1 つの任地に 4 年以上も在勤したことでじっくりと腰を落ち着けて仕事に臨むことができましたし、私生活も大変充実したものとなりました。

着任時期は 12 月でしたが、空港で総領事館の出迎えの車に乗り込んで、運転手の説明を聞きながら市街地に向かう高速道路の車窓から眺めたモントリオールの遠景は、中心部にモン・ロワイヤルの小高い丘が見え、その麓辺りからセントローレンス川の方向に何棟もの高層ビルが建ち並ぶ様子が目に飛び込んできて、如何にも北米の大都会といった印象でした。高速を降りてダウンタウンに入ると、近代的なビル街の谷間に教会の建物やらヨーロッパ調の古い建築様式の重厚な建物などが垣間見え、近代的なだけではない街の奥行きを感じました。中心街にある 30 数階建てのホテルに到着したのは夕刻でしたが、運転手によれば総領事館はホテルの 1 ブロック隣にある 45 階建てのオフィス・ビルに入居しているとのこと。せいぜい 5~6 階建てのビルしかなかったアンカレッジの風景を見慣れていたので、久しぶりに高層ビルを目の前にしたせいか、少しどぎまぎしてしまいました。運転手が引き上げた後、チェックインを済ませてダウンタウンに出てみると、繁華街はクリスマス・ショッピングの人出で賑わい、耳に聞こえてくるのは人々が交わすフランス語、夜の街路には色とりどりのクリスマスのイルミネーションが輝き、ヨーロッパの街の風景を連想させる何とも華やかで雰囲気が印象的で、“北米のパリ” と呼ばれていることに妙に納得しましたし、この街で仕事をしていくこれからの何年間かを想像して気分が高揚したものです。

モントリオールの歴史

モントリオールのフランス語文化圏としての歴史は、1500年代前半にフランス人の探検家ジャック・カルティエがモントリオールに到達したことが始まりですが、現在のモントリオールをはじめとするケベック州やニューブランズウィック州などの地域にフランス人が本格的に入植を始めたのは、「ヌーヴェル・フランス（フランスが北米大陸で植民を行っていた地域）の父」といわれたフランス人の探検家サミュエル・ド・シャンプランが1600年代初頭に現在のモントリオールを訪れて入植活動を行って以降のことです。その後、フランスは英国との7年戦争（フレンチ・インディアン戦争）に敗れて植民地のほとんど失い、フランス人移民も英国の支配下に入りましたが、それ以降もモントリオールは毛皮交易の中心地として栄え、さらには5大湖を経由してカナダ内陸部と大西洋を繋ぐ中継地の河港として栄えてきました。なお、シャンプランやジャック・カルティエの名前はモントリオール島とセントローレンス川の対岸を繋ぐ橋梁の名前として現在もなじみがあります。特に、シャンプラン橋は全長3.4kmとカナダ最大の河川橋で、モントリオールと米国ニューヨークを繋ぐ幹線高速道路の一部を成しており、年間5,000万台もの車両が行き来する、人流、物流に欠かせない重要な役割を果たしています。

一般にモントリオールと呼んでいるのは、セントローレンス川の中州を形成しているモントリオール島のことで（厳密には、行政区分上のモントリオール市は島の中心部に限られ、外縁部はモントリオール市とは別の独立した複数の自治体で形成されています）。モントリオールは、1970年代まではカナダ最大の商業都市として発展してきましたが、ケベックでカナダからの分離独立運動が起こったこと、さらにはケベック州政府がフランス語の公用語化政策を進めたことなどもあって、英語系住民が州外に転出したり英系企業が本拠地を州外に移転したりといった動きがあって、現在はトロントにトップの座を奪われカナダ第2の都市となっています。

歴史的な経緯から、モントリオールの大半がフランス系住民で占められており、公用語は1977年のケベック州法（フランス語憲章）によりフランス語のみとなっていますが（カナダ国家としての公用語は英語とフランス語の2言語）、世界各国からの移民が多いのが特徴で、英語も一般的に話されており、住民の多くがフランス語と英語のバイリンガルまたは3か国語以上を話すマルチリンガルです。移民は、1980年代には中米のハイチや中東のレバノン、マグレブ地域（アルジェリア、チュニジア、モロッコ等地中海沿岸のフランス語圏）、ベトナムやカンボジアなどフランスの旧植民地であった旧インドシナ地域からの移民が多かったように記憶していますが、最近では中国、香港などの東アジア系や南米系の移民も多いと聞きます。移民が多いことの背景には、ケベック州やモントリオールの大半を占めるフランス系住民自体がカナダ全体では少数派であり、他民族を受け入れることに抵抗が少ないのではないかと個人的には思っています。そうしたことから、他の英語圏カナダの都市に比べると多彩な人口構成になっており、ニューヨークほどではないにしても北米でも屈指のコスモポリタンな都市といえるのではないのでしょうか。

モンリオールの街並み

人口は約 400 万人と書きましたが、これはモンリオール島を囲むようにセントローレス川の両岸にある周辺都市を含めた一つの経済圏を形成する大都市圏としての人口であり、モンリオール島だけに限って言えば 200 万人弱の人口です。規模は違いますが、ニューヨークがマンハッタン島を囲むようにイースト・リバー及びハドソン川対岸の地域を含めて一つの経済圏を形成しているのと似ています。島の面積は、東京 23 区より一回り小さい程度ですが、1km²当たりの人口密度は 23 区が 1 万 5 千人なのに対し、モンリオール島は 4 千人弱と約 4 分の 1 ですので、人々が密集して暮らすこともなく比較的ゆったりしています。

島のほぼ中央にモン・ロワイヤルの丘があり、丘を中心にして公園が東西 2.5km、南北 4 km の規模で広がり、丘の東側から南東側のセントローレンス川にかけて繁華街を含む市街地を形成しており、それ以外の地区は住宅街となっています。島の中央東部のセントローレンス河畔には 17 世紀に建設された旧市街 (Vieux-Montréal) が保存されており、古い石造りの建物群と石畳の街路、フランスの植民地時代に建設された旧港 Vieux-Port de Montréal などの施設、市庁舎などがあります。また、旧市街には北米最大のカトリック教会であるモンリオール・ノートルダム聖堂が聳え立っていますが、外観の荘厳さ、内部のステンドグラスや装飾、北米最大規模のパイプオルガンなど、全てにおいて一見の価値がある建造物です (普段は宗教に無頓着な筆者も、在勤中に一度だけ興味本位で友人と雪の中を歩いて聖堂のクリスマス・イブのミサに行ったことがあります。パイプオルガンの調べと讃美歌を聴いているうちに、柄にもなく厳粛な気持ちにさせられたことを覚えています)。旧市街を歩いていると、まるでヨーロッパのどこかの街にいるような錯覚にとらわれるほどです。この地区には、評判のフレンチレストランが何軒もあって、仕事の上でも私的にもレストランを利用していましたが、どのレストランも観光客やビジネス客で満席でした。

蛇足ですが、州都ケベック・シティにもモンリオールと同様に旧市街があります。ケベック市も、サミュエル・ド・シャンプランによって建設された街です。こちらの旧市街は、モンリオールよりもさらに歴史が古く 1700 年代前半に建設されており、セントローレンス川に面した丘の上の城壁に囲まれた北米唯一の城郭都市として知られており、中心に旧市街のアイコンともいえる緑青の吹いた銅葺き屋根のシャトー・フロントナック・ホテルが聳え立つ景観は圧巻です。この旧市街と周辺地区は、後に「ケベック旧市街の歴史地区」として世界遺産に登録されています。中でも、シャトー・フロントナックは、北米でも指折りの歴史があるホテルとして有名です。在勤中に一度は滞在してみたいと思っていたホテルでした。当時は、料金やホテルの格式、予約の難しさなどハードルが高く一度は断念したのですが、いつかは滞在してみたいという思いが頭の片隅にありました。離任から 22 年後のギリシャ在勤当時、家族でケベック市郊外へスキー旅行に行く機会に恵まれ、その折りに運よく予約が取れてクリスマス・イブに宿泊するという念願を果たすことができました。わずか 1 泊の滞在でしたが、ホテルの雰囲気やサービスなどこれ以上はないと思われるくらい全てにおいて満足させられる滞在でした。

話をモンリオールに戻します。繁華街は、旧市街とは大きな通りを 1 本隔てた西側にあり、中心部を北東から南西にかけて走る 5~6 本の幹線道路と交差する 30~40 ブロックほどの間に集中していて、そこにオフィス街、ホテル、デパート、専門店、レストラン、パブなどが連なっているとい

う状況でした。また、中心部には国連の専門機関である ICAO（国際民間航空機関）、各国総領事館、大学（McGill 大学、ケベック大学モントリオール校）などもあって、非常にコンパクトにまとまっているのが特徴でした（もちろん、現在の市街地は当時から比べると大きな広がりが見られますが、これについては後述します）。モン・ロワイヤル公園の頂上（といっても標高 233m）に登ると市内を一望に見渡すことができ、モントリオール島の地形や街の広がりがよくわかります。市街地の高層ビルは、市の条例によってモン・ロワイヤルの高さを超えないことが建設の条件となっていますので、今に至るまで市内の高層ビルで 230 メートルを超えるものは建てられていません。

つづく

（公財）栃木県国際交流協会 参与 石塚勇人（略歴）

1977 年外務省入省。外務本省では主に経済協力局、国際協力局で途上国の開発協力を担当。海外勤務歴は、在イスラエル大使館に始まり、在アンカレッジ総領事館、在モントリオール総領事館、在連合王国（英国）大使館、在南アフリカ大使館、在ギリシャ大使館、在ドイツ大使館、在インド大使館、在ニューヨーク総領事館の 9 公館で計 29 年間。ギリシャ、ドイツ、インドの各大使館で領事班長を歴任。在ニューヨーク総領事館領事部長を最後に 2019 年 3 月退官。同年 5 月より現職。